

増え続けるいじめ問題の解決のため、 80万冊の啓発ハンドブックを子どもたちに無料配布。

文部科学省で「いじめ」に対する研究が始まったのは1985年。すでに四半世紀になろうとしているが、今なお増加傾向にある。むしろインターネットや携帯電話の普及で、発見しにくい状況になってしまった。埼玉新聞社は地元の各機関と協力し「埼玉からいじめ・虐待をなくすために」キャンペーンを展開。中でも子どもたちに身近なキャラクターを用いたいじめを考えるハンドブックは大きな反響を呼んでいる。

埼玉県遊技業協同組合と埼玉新聞社の
思いが一致して、キャンペーンは始まった。

約12万件。2006年度に全国の小中高校などで認知された「いじめ」件数である。数値はほぼ毎年のように増えている。2006年度からは、それまで「発件数」としていたいじめの定義が変更され、誰かが「いじめられた」と感じたものを「認知件数」としたため、大幅に増えているのだが、実態に近い数値が出てきたとも言えよう。

埼玉県でも同様で、毎年のようにいじめ件数は増えている。こうした状況に対して、埼玉新聞社では埼玉県教育委員会と共同して「埼玉からいじめ・虐待をなくすために」キャンペーンを展開した。

「埼玉新聞は埼玉県の唯一の県紙であり、『地域を知るともっと楽しくなる』を合い言葉に地域の情報を発信し続けています。しかし、いじめの記事も増える一方で、なんとかしなければいけないと考えていました。そこに埼玉県遊技協さんから声がかかったのです」と同社事務局企画部の竹内健二さんは語る。

折しも埼玉県遊技業協同組合では、創立40周年を記念して地域の子どもの健全育成のための企画を模索していたのだ。双方の思いが一致して、キャンペーンが開始された。

今回の運動のメインとなるのが、「キャンペーン ハンドブック」である。

「いじめの問題は家庭では話しにくいのです。子どもさんは親に心配をかけたくないし、親も聞き出しにくいわけです。それでこのハンドブックは話を切り出すきっかけになるような構成にしました」と竹内さん。

ハンドブックを開くと、子どもたちに馴染みの深い「ドラえもん」が飛び出してくる。誰でも知っているアニメであるとともに、主人公「のび太くん」自体がいじめられっ子のキャラクターで、キャンペーンテーマにすんなり入っていける構成だ。中にはのび太くんの味方であるはずの「しずかちゃん」が、時にのび太くんを傷つけているというエピソードも入っている。いじめの解釈を広げ、故意ではないいじめが存在し、ひょっとするとあなたも無意識に友だちを傷つけている可能性もあるということを示唆している。問題提起をさらりと行っているところがなかなか巧みである。

いじめを減らすだけでなく、
いじめに立ち向かう勇気と知恵を伝えたい。

このハンドブックは県内の保育園、幼稚園、小中高校あわせて80万人に配布された。また埼玉新聞紙面でもキャンペーン特集を行い、県内の有識者の意見などを掲載した。さらに埼玉県遊技業協同組合の各ホールにポスターを掲出するなどさまざまなメディアを使った啓蒙活動が行われている。

もちろん、すぐにいじめ減少に結びつくわけではないが、反響は大きかった。



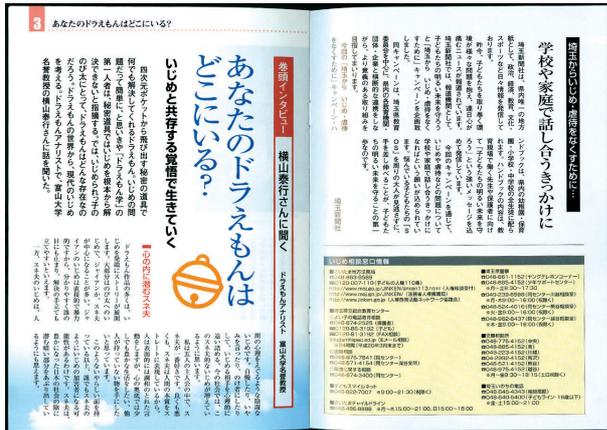
配布されたハンドブック

平成18年度埼玉県公立学校におけるいじめの発件数等

区分	小学校	中学校	高等学校	特別支援学校	合計
認知件数	1,425	2,013	194	3	3,635
解消件数	1,249	1,697	160	2	3,108
継続支援中	126	235	20	1	382
解消に向けて 取組み中	35	67	1	0	103
他校への転学、 退学等	15	14	13	0	42
解消率(%)	87.6	84.3	82.5	66.7	85.5

※解消率:解消件数÷認知件数×100
いじめの解消については平成19年3月31日現在の状況である

出典:埼玉県教育委員会



「ドラえもん」に例えてわかりやすく説明されている



気軽に相談できる「SOSミニレター」も配布した

「例えば親御さんが電話をかけてこられて、ハンドブックにご意見を寄せていただいた大学教授の方のお話に感動して、どうしてもお会いしたいというような申し出もありましたので、おつなぎしました。いじめ研究をされている大学や公民館からもハンドブックを送って欲しいというような申し出がありました」と竹内さん。

80万部を印刷して配布するというのは埼玉新聞社にとっても前例のないチャレンジだった。しかし話を進めていくうちに、埼玉県教育委員会などの公的機関も、また地域の民間企業もこの問題の解消に前向きで、協力を申し出てくれた。12月13日にはAJOSCとの共催で、いじめをテーマにした社会貢献フォーラムを開催するなど、大きなキャンペーンに育っていった。いじめ問題に対する社

会的な関心度を改めて感じたと竹内さんは語る。

「ただ一方で、いじめをまったくなくしてしまうというのは不可能なんですね。人間が社会を形成している以上、どうしてもいじめ的なひずみは生まれてきます。だから逆にそうした状況に立ち向かう勇気や知恵を身につけることも、このハンドブックでは訴えましたし、これからも活動していきたいと思っています」

ハンドブックでは、のび太くんがドラえもんの道具を使っていじめっ子たちを次々と消していくシーンがある。やがて誰もいなくなってしまう、のび太くんは途方に暮れる。そんなストーリーが子どもたちの目にどのように映り、何を学んだのか。埼玉新聞社の続報を待ちたい。



●担当者より 個々の活動を、大きな運動へと結ぶのが新聞社の役割だと知りました。

今回のキャンペーンを通じて新聞社の役割を再認識しました。同じような社会貢献活動をしたいと考えている企業や組織を、個々の活動ではなく、それらをつないで大きな運動に展開していくのもです。今回はポスターやチラシの印刷でAJOSCさんのご支援をいただき、より大きな運動に結びつけることができました。今後も機会がございましたらご協力いただければ幸いです。

株式会社 埼玉新聞社 業務局企画部 竹内健二さん